

茶道を通じて得たもの

北海道教育大学釧路校三年（北海道）

野本 萌絵

私は教育大学の三年生で、今年度から先輩の後を継いで茶道部の部長を務めている。しかし、人に何かを伝えたり、広く周りを見て行動したりすることが得意ではない。上手く先輩に指導することが出来ず、足りないお道具に気が付いて直ぐに取りに行くのも先輩で、きちんと部長としての役割を果たすことができていないと感じている。また、市内での青年部のお茶会に何度かお手伝いとして参加をさせていたのだが、青年部の方々の場に応じた臨機応変で素早い動きを見ては圧倒されてばかりである。

そんな広い視野で周囲を見られるようになること、きちんと伝えられるようになることが課題の私だが、これまでを振り返ると、茶道を通じて得ているものがたくさんあると気が付いた。

その一つは、様々な「音」が聞こえるようになり、「景色」が見えるようになってきたことである。「葉の花が咲き

始めている。夏らしさを感じる空だ」。問答で御銘として季節を表す言葉に触れるようになってから、そんなことに目を向けられるようになった。

こうして今までより少し広い世界を見ることができるようになり、私は、そこに「見える楽しさ」を感じるようになった。同時に、柄杓で釜に水を入れる音、お湯を入れる音、お茶を点てるときの三層の音（泡を起す勢いの音・泡の層を厚くするために少し優しい音・泡の肌理を整える無音）といった音を積極的に聞き、「聞こえる面白さ」も感じられるようになってきた。しかし、疲れていたり慌てていたりする時には、音や景色をあまり感じることが出来ず、きれいな音をたてることも出来ない。だからこそ、前を向いて歩き、心を落ち着かせて過ごすことが大切だと感じている。

また、伝える手段は「言葉」だけではない、ということも、茶道を通して得たものの一つである。一昨年から二年間、コロナ禍で大学祭が中止になってしまった。しかし、そのような状況でもできることとして、お世話になっている大学の先生方をお招きして感謝の気持ちを伝えようとお茶会を行うことになった。これは、私にとって、普段のお稽古以外で誰かのためにお茶を点てる初めての機会だった。ほとんど使ったことのない筆ペンを持ち、決して上手いといえる文字ではないが、心を込めて巻紙を書いた。当

日は、学校長を始めとする先生方の前でお点前をし、お茶とお菓子を差し上げた。緊張して、いつも以上に茶筌を持つ手にも力が入ったが、それでもきれいな泡がたつように、三層の音を聴きながらお茶を点てた。

言葉で伝えることが苦手な私は、お茶を通して感謝を伝えるという経験によつて、思いを表現する手段を増やしてもらったように思う。お茶を点てるのみならず、帛紗捌きなど一つひとつの所作に心をこめ、少しでも気持ちが伝わるようにお点前をしようと意識するようになった。

今年度は、秋に大学祭の開催が予定されている。そこで私に与えられている役割は「半東」である。これまで、話す場面を避けて通り、言葉以外の行動で伝えるようになってきたが、半東になるとそうはいかない。

「広い視野で会場全体をみること」「お客様に思いを伝えるとともに、自然な流れの中で言葉のキャッチボールをし、如何に楽しんでもらえるか」が求められる半東という役割には、私の課題がたくさん詰まっている。そんな役割を務めるにあたり、とても大きな不安を抱いている。しかし、大學生生活三年目にして初めての大学祭で多くの方に茶道部の活動を見ていただけることに対する嬉しさと、自分自身が茶道を通して得てきたものを、どれだけ発揮できるのかという楽しみな気持ちもある。

茶道を通して、おいしいお茶を点てるというだけでなく、

広い世界の中で音や景色を感じたり、伝えたりする力も得ることが出来ているように思う。すぐに自分の課題を克服することは難しいかもしれないが、これからも茶道を続けていく中で、技術面のみならず、自分自身の心も成長させていきたい。

これまで得てきた様々な音や景色を感じる力、そして気持ちを伝える力を人との関わりの中でも積極的に用いて、まずは大学祭当日、部長として、半東としての役割をきちんと果たすことができるよう日々努力していきたい。